

- 大原賢二, 2005. トダセシジゲンゴロウ *Copelatus nakamurai* の徳島県からの記録. 徳島県立博物館研究報告, (15): 37-41.
- Régimbart, M., 1899. Revision des Dytiscidae de la région Indo-Sino-Malaise. Annales de la Société Entomologique de France, (68): 186-367.
- 坂本 充・秋山美文, 2001. ヒコサンセスジゲンゴロウの広島県における記録. 月刊むし, (367): 49.
- 坂本 充・秋山美文, 2003. ナチセスジゲンゴロウの広島県における記録. 月刊むし, (386): 42.
- 佐野真吾, 2015. 神奈川県初記録のヒコサンセスジゲンゴロウ. 神奈川自然誌資料, (36): 57-58.
- 多比良嘉晃・北野 忠, 2001. 静岡県引佐町でヒコサンセスジゲンゴロウを採集. 月刊むし, (370): 7-8.
- Takizawa, M., 1933. The Dytiscidae of Japan (Part II) (Hydroporinae). Insecta Matsumurana, 7(4): 165-179.
- Vazirani, T. G., 1968. Contribution to the study of aquatic beetles (Coleoptera). 2, A review of the subfamilies Noteridae, Laccophilinae, Dytiscinae and Hydroporinae (in part) from India. Oriental Insects, (2): 221-341.
- 渡部晃平・久松定智, 2016. 愛媛県のゲンゴロウ上科(コウチュウ目). 面河山岳博物館研究報告, (7): 1-17.

(2017年10月11日受領, 2017年11月24日受理)

【短報】新潟県におけるエゾゲンゴロウモドキの追加記録

エゾゲンゴロウモドキ *Dytiscus marginalis czerskii* Zaitzev, 1953 は、環境省のレッドリスト2017において絶滅危惧II類に選定されている大型(体長31~36 mm)のゲンゴロウ科甲虫である(永幡, 2015). 本種は国内では北海道の南部から東部, および長野県, 新潟県, 栃木県, 福島県以北の本州各県から記録されている(永幡, 2015). 分布の南限付近では特に記録が少なく, 記録が未公表とされている長野県の場合は不明であるが, 栃木県と福島県では産地が局地的で極めて少ないことが知られる.

日本海側の南限にあたる新潟県においては, 粕谷(2010)で灯火に飛来した例が公表されているだけだったが, 未公表の産地についてもインターネット上に記述が見られ, 成虫だけではなく幼虫も得られているようである(2017年9月時点).



図1. 新潟県産エゾゲンゴロウモドキ(スケールは1 cm)。

筆者らは比較的近年に本種を新潟県内で得ているので, 記録を示して採集時の状況を付記する.

2♀, 新潟県中越(標高500-600 m), 10. X. 2015, 高野雄一採集, 岩田泰幸および愛媛大学ミュージアム収蔵予定.

本種を含むゲンゴロウ科の大型種の詳細な産地を公表することは, 採集圧を高める危険性があることから, 本報告では上記の

ように地名の詳細を伏せた. なお, 標本に付したラベルには可能な限り詳細な地名を明記してある.

記録個体のうち1頭(図1)は, 採集した時点でほとんど傷や擦れがなく, その年に羽化した新成虫と推測される. もう1頭は体表面に細かい傷や擦れがあり, 色彩(特に黄色)がくすみ, 触角の欠損も見られたことから, 少なくとも1年以上前に羽化したものの生き残りと考えられる. 本種は飼育下では成虫で2~3年ほど生存するとされる(例えば, 都築ほか, 2000).



図2. 採集地(2017年6月6日, 岩田撮影)。



図3. 採集地(2015年10月10日, 岩田撮影)。

採集地は、ブナが多い落葉広葉樹林に囲まれた小規模な池である。日当たりはよく、岸際にヨシが生え、池底に落ち葉が厚く積もっている。池には細流から冷水が流れ込んでいる。2015～2017年にかけて時期を違えて池の状況を確認したところ、年間で水量が大きく変動することが分かった。5～7月にはほとんど干上がり(図2)、8月から水量が増え、9～11月末には水深が2m以上となる(図3)。約2年間で水量の変動サイクルはほぼ変わらなかったことから、同様の水量変動は毎年起こっていると考えられる。なお、12～4月は池に通じる道が積雪で埋まるため、調査は実施できていない。

本種は山間部の地すべり地形に形成された溜池に生息することが指摘されているが(永幡, 2017)、今回の産地もそれに準じるもので、地すべりでできた窪地がせき止められて水が溜まり、池状になった所である。

エゾゲンゴロウモドキと同時に得られた水生甲虫は、クロゲンゴロウ *Cybister brevis* Aube, 1838, メススジゲンゴロウ *Acilius japonicus* Brinck, 1939, クロズマメゲンゴロウ *Agabus conspicuus* Sharp, 1873, ヒメゲンゴロウ *Rhantus suturalis* (Macleay, 1825), およびミヤマミズスマシ *Gyrinus sachalinensis* Kamiya, 1936 (雄交尾器を確認済)であった。これらは水量のある時期に一時的に確認されている。また、5月には池の周辺の小さな湿地でシナノオオミズクサハムシ *Plateumaris constricticollis babai* Chûjô, 1959 が発生していた。

なお、ここから標高が50mほど下がると、水田やため池などの止水域の数や面積は増加し、それに伴って大型種としてはゲンゴロウ *Cybister chinensis* Motschulsky, 1854 やクロゲンゴロウを目にする機会が増える。しかしこの辺りになると基本的に夏場は水温が高く30℃を超えるため、エゾゲンゴロウモドキの生息環境として多くは不適であると思われる。

本稿を執筆するにあたり多数の貴重なご助言をいただいた渡貫修太郎氏(新潟県長岡市)、標本写真を撮影いただいた岩田朋文氏(富山市科学博物館)、標本の収蔵を快諾いただいた吉富博之博士(愛媛大学)に御礼申し上げる。

引用文献

- 粕谷伸孝, 2010. 新潟県でエゾゲンゴロウモドキを採集. 月刊むし, (475): 42.
 永幡嘉之, 2015. エゾゲンゴロウモドキ. p. 252, 環境省編, レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-5, 昆虫類, ぎょうせい.
 永幡嘉之, 2017. 里山の歴史を探る (9). 月刊むし, (558): 18-28.

都築裕一・谷脇景徳・猪田利夫, 2000. 改訂版 水生昆虫完全飼育・繁殖マニュアル. 255 pp., データハウス.

(岩田泰幸 160-0022 新宿区新宿 2-1-8
 公益財団法人文化財虫菌害研究所)
 (e-mail: laccotrephes_1874@yahoo.co.jp)

(高野雄一 354-0026 富士見市鶴瀬西 3-3-18)

【短報】ハラアカクロテントウを東京都と神奈川県で採集

本州未記録のハラアカクロテントウ *Rhyzobius forestieri* (Mulsant, 1853) (図1, 2) を東京都と神奈川県で採集したので報告する。

1♀, 東京都稲城市向陽台(城山公園), 16. VII. 2016, 伊藤淳採集; 1♀, 神奈川県相模原市南区相模大野, 18. III. 2017, 阪本優介採集。

稲城市産は体長3.3 mm. 木のスイーピングで得た。相模原市産は体長3.5 mm. ケヤキ樹皮下で越冬中のもので得た。標本はそれぞれの採集者が保管している。同定は佐々治(1992)と日本環境動物昆虫学会編(2009)によった。ただし後者のp. 18では和名がアカハラクロテントウとなっているが、これは誤りであろう。同書のp. 108とp. 127ではハラアカクロテントウとなっている。

本種はハワイ・フィジー・ニューカレドニア・ニュージーランド・オーストラリアから知られるほか、北米に移入されている(佐々治, 1992; 金・森本, 1995)。日本では福岡市内で見出され(金・森本, 1987-筆者らは未見)、佐々治(1992)がハラアカクロテントウの和名を与えて解説している。

本州では、ウェブ上に東京都区内での観察例が見られる(フッカーS, 2014, 2017)が、文献上の記録はないようなので、ここに報告する次第である。

引用文献

- フッカーS, 2014. 3ミリの黒いヒメテントウ その2. っぽい生きてる. <http://tokyoinsects.blog14.fc2.com/blog->



図1-2. ハラアカクロテントウ♀(阪本撮影)。1, 背面(稲城市産); 2, 腹面(相模原市産)。